

# 直木賞受賞作

第11回(昭和15年上半期)受賞

小指

堤千代

『オール讀物』昭和14年12月号

底本

平成元年3月15日 文藝春秋刊『オール讀物 平成元年3月臨時増刊号 直木賞受賞傑作短篇35』

入力日

平成19年4月28日

入力責任

Web サイト「直木賞のすべて」

URL <http://homepage1.nifty.com/naokiaward/>

Email [pelebo@nifty.com](mailto:pelebo@nifty.com)

新中河の染ちやんが指を切った、そのうわさを聞いた時私は、すぐはア瘰疽だと思いました。

ですから、それと一緒に聞かされた金三万円也に痛いのも忘れたんだの、どの朝刊夕刊にも重大声明ッて言う活字と一緒に出ている何とか大臣さんの写真のあのモウニングの内ポケットには、染ちやんの白い細い指がアルコールづけになって肌身についているだの、その金で内緒の人と一緒にあって、あの妓のまげはモウ真物だとか、そんなのは残らず、蔣さん行きだと思いました。

何故すぐ瘰疽だと思ったかと言いますと、妾のもソックリ当推量なんですの……。もと、家に居ました内箱のお新ッてんでしたが、そりやア、カン性でしてね。つめを取るのに肉がのぞく位短く、つまないと気がすまないんです。それも二日おきに一寸のひまに、立ちながらでも、ばちんばちん小鋏を使うんですが、大掃除の日に雑巾をゆすぐのを手伝った時からだとか言ッて、一晚の中に十本の指が左の親指を残して全部真黄色になッてしまッたんですよ。病院じゃ自動車の煙が消えない内に手術にかかッてくれたんだそうですけれど、人さし指は二番目のフシから、薬指は右左ともツメの所から助からなかつたんです。それから土用中でも手袋をはめていましたけれど、目で見て知ッてましよう、帯をしめて貰ッたりしても何んだか背すじが寒いんです。それで今でも妾は雷様と瘰疽は同じ位こわいんですの。だもんですから染ちやんのも、テツキリ瘰疽と思いました。

あの器量ですからね。災難の上に人の口が、やかましいんだと思ッました。

売出し盛りの妓ッて者は、世間様方のお嬢様のお嫁入り前同様の大事な身体ですからね。そんな極印を打ッつ者じゃありません。とにかく瘰疽だときめて一度は会いに来そうなものだ、会いたいと思ッていま

したが、そうなると何処でもかけちがつて顔が合わないんですよ。その内、秋の靖国神社の大祭の日でしたっけ。こんな者ですけれど朝から身じまいして、おまいりに出かけたんです。随分と早かつたつもりでしたけど、人の足で砂利が見えない程でしたわ。

心だけの、おまいりをして御鳥居のわきから出ますとね、すぐ三尺程前をね、こう背のすらりと高いお嬢さんが歩いて行くんです。これも後姿でしたが、肩の構えからして重いお立派な、お年召した軍人さんに引きそッて、丁度、末のお嬢さんかお孫さんに見えます。

銀うるしの少しじみな羽織に、小さく束ねた髪のもとに白いカーネーションの花をつけてました。鱈皮の草履で小さくいそぎ目に、どっしどっしとふむ長靴とならんで行くのが、何んだか見おぼえが有りますから、かけぬけて、そつと振り返ると、それが染ちやんだつたじゃありませんか。

おつれの軍人さんは、おひげも眉も白くていらつしやる。御身分は肩の上や胸の所でもわかりますけど、歩いておいでなさる周囲二三尺は、揉み合ッてる人波が自然に開いてのくようなんですもの、とても私にちゃんづけで呼ばれる女のおつれじゃありません。

勿論かたずをのんじまいしてね。後先へッて行きますとね、アノ坂を少し下りた辺で、

「では」

と軍人さんの方から手をゆるくお上げなさると、染ちやんも首すじを細く下げたんです。

すると何処に居たのか若い将校さんが、つツと出て来て、うしろから外套をおきせすると軽くおうなずきなすッて、そのまま人波の中へわけ入ッておしまいなすッたでしょう。

私、いそいで染ちやんの、うっかりと立ッて見送ッてる背後にまわッて、

「ばア」

って指でね、目かくししてやったんですよ。

「まア、いや。古いわ」

と、かぶりで振り払って見返ると、

「まア、姐さん」

と、たちまち、みずみずしい笑顔になりました。

「今のは」

「何と見立てて」

「そうね、染ちゃんの三ツの年に生き別れのお父ツアんと、めぐり合い」

「ふうん、花柳の役所ね。いいわ」

と、につこりしましたが、

「私、姐さんに会いたかったのよ。聞いて頂きたい事ばツかりなの。

つき合つてよ」

と、くせのように髪在所へやった手の、白く繻帯してあるのが、目にしみたでしょう。

「そう、いいわ。どこへでも」

「静かな所でなくちやア」

そうして十五分程後、私達は女同士ひざをつき合せて、手を取り合うように坐っていました。

「淋しくって、いい花ね」

などと、はじめは染ちゃんも細い苔を這わせた石の上に、小さく白い萩の花びらのこぼれたのを眺めて、月並な事を言つて居ましたが、

やがてむきなおると、

「姐さん、私近い内にひくわ」

と言ひ出しました。

「そう、やっぱり」

と、顔を眺めると、

「この話、おききになつたでしょう」

と、白い繻帯の手を、ぱったりと卓の上ののせて見せて、

「私、この話聞いて欲しいの。きいてよ」と思い入つて話し出したんですよ。

## 二

そう、去年の春の矢張り靖国神社の大祭だったわ、花火がぼうんぼうんいつてましたもの……。

その日の昼下りに「そのままでもいいから」ツて電話が、かかつて来たの。名が通してあつてそれが多分姐さんも御存じだと思つて、伝通院の玄白先生なのよ。ほら酔つちまうとすぐ、「俺は現代の杉田玄白だぞ。貴様等ア知らんか」とか何とかで気えんをお上げなさるでしょう。それで通つちまつた方だわ。伝通院で大きな病院を持つていらつしやるんですとき。お酒を上つちや、わつわつとさわぐばかりで、とてもサツパリしていらつしやるものだから、皆も「玄白先生のお座敷はラムネになるネ」ツて言い言ひしてたのよ。

その方が支那事変が始まるとすぐ御出征なすつてね、歓送会の晩にも、

「見ろ、俺は医者だからこの年になつてもお役に立つのだ。お前達も、いろは医者にしろ、医者に」

ナンテ大威張りでいらつしやつたわ。

向うにお出でなすつてからも、月に一度位のお葉書があつたから、私達ひいきにして戴いてた連中がよつて、慰問袋を送つたりしてたんです。

杭州ツて所からは絵葉書で、何でも蘇小々とか言ふあちらの昔の芸者のお墓の写真なのよ。それに「これはお前達の御先祖の墓だ。この女は纏足で足は小さかつたが、どんな山坂でもコロバなかつたさうだ」ツて書いて有るの。

「憎らしいね」ツて大笑いしちゃつた。

それから近々帰還するかも知れないと言ふ、おたよりが有つて二月

ばかりしたところなの。

お電話で合点すると、すぐ私は拘留の金具をとめながら自動車に乗ったわ。

そうしたら、いつものようにアグラで、ひじつきに両ひじをついて、顎を掌のせて居なすったわ。私がいって来るのを見ると、

「やア」

って顎を下から上へシヤクつて、一寸も変つちやいなさらないの。和服だけど額の所だけ薄白く残して、真黒の日焼けで、肩はばも広くなつたみたいで、お若くなんなすつたように見えたわ。

私なつかしかつたから膝でアチラの膝をおす位にべったりと坐つて、思わず、

「まア黒くなつちやつたわア」

と言つちまつたの。

「なアんだ。そんな、あいさつがあるか」

と平手で顔をなでまわして見なすつて、

「併し君はべっぴんになった。一年見ない中にスゴク女ツ振りが上つたぞ。もつとも俺の目のせいもあるな。百日も湯に入らんような避難民のクウニヤンばかり見てたからナ。内地の女はどれもこれも良くて、しようがないんだ。」

「ええ、ええ。殊に私は湯上りでございますからね。ほほほほ」

と私は首をかしげて笑つて、

「さつそく、お一ツ」

と、お銚子を取上げながら、

「皆は未だなの」

と聞きました。無論、他の連中も一緒に呼ばれていることと思つていたんです。

「いや、酒は当時、おたちものだ」

と、はつきり手を振つて、

「それに今日は用があつて君を呼んだんだ。それでなけりや召集解除にもなつてないくせに、昼日中ノココんな所へ来られるかい」

本当にお猪口の縁もぬれてない。お好きだったんですからねえ。思わず、まじめになつてお銚子を下においたわ。

「あら、私に、どんな御用」

「うん。今、俺は陸軍病院につとめてるんだが、君に兵隊の慰問に来て貰いたいんだ」

「あら、慰問ですの」

それなら何回も経験があるので、

「何日頃でしょうか。来週の土曜は一寸こまるんですけど。その他なら——」

「いや、そんな慰問じゃないんだ」

と先生一寸、手持ぶさたらしく、

「俺のついてる患者だ。少尉さんさ。戦地でも同部隊に居たし、帰つてからも偶然俺が病院であずかるようになったんだがね。一寸その男に頼まれたと言うより、俺が思いついた事があつてね。君にその男を見舞つて貰いたいんだよ。演芸慰問に行つて踊つたり唄つたりすると同じ意味でね。それも無理だろうけど、今からでも一緒に行くつてくれなくちゃ間に合わないんだ」

と、思い入つたように私の顔に見入りながら、

「その患者はね。明日俺の執刀で両腕を切断してしまうんだ」

「まア」

と私は、鳩尾が堅くなつたの。そして、

「まいますとも。私みたいな者でお役に立つんでしたら、どうぞ」

そういきこんで答えないわけには行かなかつたわ。だつてこの場合の返事には、便所掃除させるんだ、すぐ来いと言われたつて、これより他には無かつたじゃありませんか。

「そうして私、その方に、どんな事をして上げたら、いいのかしら」

「どんな事ッたつて」

と先生は苦笑いして、

「相手は白衣の勇士だ。支那兵じゃないからネ。大した難題は言い出しやしないさ。もし不愉快に感じたら遠慮はない。ハッキリことわればいい。それは君の感情一ツだよ」

「そりゃ私、私だつてその方が、こまるような事を私におつしやるなんて思つてやしないけれど」

「そりゃ、ひよつとすると、こまるかも知れないさ。ただ程度によるがネ」

と先生は薄ら淋しい笑いも漂わせて、

「相手は生きるか死ぬか分らん所なんだ。俺がたのまれもせんに、君をひっぱり出しに来る位だからね。そこを承知して貰いたいんだ」

「ええ、わかりましたわ」

と私も深く、うなずいて、

「でも今、ここからすぐお供つてわけにも行かないの。そのまま出て来ちゃつたでしょう。髪ゆいさんも、まだなんですもの」

と少しユルんだ髪の根を持つて、ゆすつて見せました。

「そうサ。俺も相乗りで、かけつけは、おそれいる。じゃアこうしよう。三時までに来てくれたまえ。病院の前で出むかえてるから。それで」と、考えて、

「ナルべく綺麗にして来て貰おうか。綺麗な程慰問の実が上るからネ」「まア」と、うけて私は「おほほほ」と笑つておいたけれど、内心一寸ながが始まるかしらと言う気もちも、はずんで来たわ。

でも先生が、

「こればかりはやめられんでね」と、すいつけなすつたのが、ほまれなのを見ると、すぐ自分のおツちよこちよいが恥かしくなつたんです。火が近くなるのは臭いッて、キリアジを半分までしか、すいなさら

なかつたんでしよう。

「すつかり御自分をかえていらつしやる」

そう思うと私、うつむいて、指でひざの上をこすつて見ながら目を伏せてしまつたの。

### 三

髪ゆいさんの所じゃ、大急ぎで唐人髷にゆつて貰いました。浅黄と淡紅色の麻の葉の絞りを、ふさふさとかけて貰い、銀の薄いびらびらをつけて、着物も思いつきり派手にね、花模様の入つた矢がすりくずしの袷に、白地に紅のバラを描いた帯をわざと高くしめて、大和うちの組紐、緋鹿子の背負揚げをして、一寸御時節がら御遠慮物かしらと思つたけれど、指輪も一番大きいのをはめたわ。

白粉はばら色に塗つて、眉も口紅もハッキリとさせると、さアこれからと言うような生き生きした心地になつたの。

自動車で一あおりに陸軍病院にかけつけましたが、前にも演芸慰問に来た事があるから勝手は知つてるでしょう。

外科の受付の所へずんずん歩いて行くと、先生は、今度は軍服で立つていなすつて、

「早かつたネ」

と先に立つて廊下をどつしどつしいらつしやる後から、私も小走りにスリッパでついて行くと、

「さア、ここだ」

と前後に入れ代ると、片手で私の背中を押して、片手でドアを開けて一緒に中はいつたの。

畳を敷いたら四畳半無い位かしら、せまい室だつたわ。

真先に目に入つたのは真白くおわれた寝台ね。その白い物の中に、矢張り真白にまいた頭を白い枕にうめて、両手を掛蒲団の上に乗せて人形の様に寝ていなすつたわ。

私達が、はいつて来たのに気がついて、斜めに体を返しなすった時、私とびつたり顔が合ったんです。

その時よ。私、急に下げた首すじが一度にほてって、鬢きんが重くて顔が上らないような気がしたわ。

何て言ったら良いでしょう。姐さんの前じゃ、うぬぼれと言われるより他は無いかれど、だつて世の中にあんな目で男に見られた女が沢山あるでしょうか。

私、嬉しかった。通りすがりの岡持おかもち越しに自転車の上から見送られたつて、女は男に美しいと思われる位嬉しい事は無いわねえ。それがその蒲団のかけから私を見つけた顔つたら、初めはさつと赤く血がさしたのが、見る見る青く透とおって行くように色が変わりながら、ウツトリと見とれたじゃないの。遠くの虹にじを眺めるような、世の中で一番美しい物に見とれている、そんな顔なんだわ。

だから私もそれに誘われて、その方の眼の中で自分が天女になったような気がしたんです。アア、私は、いい女なんだねえ、と本気でそう思っちゃった。

「何をびっくりしたんだい」

と先生は一寸笑い声で、

「さア昨日のお約束の人だ。ゆっくり、一ツ、話をするんだね」

と蒲団のかけの顔をのぞきこんでおいて、

「お茶でも持って来ようかね」

とクルリとむき直って私に、

「まあ、椅子にでもかけて、ゆっくり御慰問を願います。あはははは」  
なんて笑い捨てて出て行っておしまいでしょう、随分これは間まが悪かったわ。なんだか素人めいてるみたいだけど、私だつて椅子に腰かけて、ハンカチを結んだり解いたりしてるより所作しよさが無かったわ。おまけに相手の人ったら蒲団の中で身体中真赤になって恥かしがつてるのがわかるんですもの。

仕方がないから、間がぬけてるけれど、

「あのう、御気分、いかがでいらつしやいまして」

つて言つて見たの。そうしたら蒲団の中からこう首を出して、私を見すえて、

「軍医殿は貴女に何か言われましたか」

つて聞くの。

「いいえ。別に——」

と、にこらせると、

「ア、そうですか。それじゃ何も聞いていらつしやらないんですね」

と急に元気づいて、

「どうもわざわざお出下いですつて恐縮です。何か、お話でもして下さいませんか」

とスツカリ安心したらしいの。すると此方こつちは一寸癪にさわるでしょう。だから、

「でも、何か貴方様に御用がお有りだそうで、それをおうかがいするようにつて、そうおつしやいましたんですけれど」

つて、いじめて上げたわ。するとその方は又、真赤な、今にもシャクリ出すようなお顔になつて、

「いや、用なんて。そんな、別にそんな事はありません。全く」

つて、こう右左へ首を振つてお見せなのよ。

「まあ、それじゃ」

と私は軽く唇を引きしめるようににして、

「先生が、おからかいになりましたのね」

と椅子から立つようになしたんです。

「いや、そんな、からかうなんて。そんな事は断然ありません。軍医殿は全く好意で、こんな事をして下すつたんです」

出来たら私の袂たもとをつかんでひきすえたそうに力を入れて仰有つたら、私も、

「それでは、どんな御用でしょうか」

と姿勢を正しくして聞いたの。するとその方はじつと私の顔を見つめて居なすって、それからハッキリと決心がついたように、

「じゃ申しましよう」

と仰有ると蒼白く緊張した顔で、

「申し上げたら取様で貴女はきつと不愉快になられるか、軽蔑されるかの何方かですよ。もし腹が立つたら僕の横ッ面をひっぱたいて出て行って下さい」

「畏まりました。私怒ったら、これでたたいて上げますわ」

って小さい拳骨をこしらえて、息を吹きかけて見せたわ。

「じゃ言います。僕はね明日両腕を肩から切断してしまうんです。それはお聞きになったでしょう」

私が、うなずくと、

「昨日の晩でした。僕は軍医殿に冗談のように言ったんです。アア、両腕を取っちゃう前に一度女の手を握って見たいナって言ったんです。そうしたら軍医殿がいいとも引受けた、僕が知合いの女をつれてきてやるナンター」

私は、黙ってその方の顔を見たわ。その方の額には汗がにじんで何だか苦しそうな。

「僕はね、二つの年に母が死にました。姉も妹も無い。従妹だつて無いです。親戚中には年老った伯母が一人有るくらいなものです。僕は父の手で書生の間で育てられました。小学校を出るとすぐ中学の二年から幼年学校にはいりました。厳格な寄宿生活の休日には父と一緒に釣に行ったり、剣道の試合に出かけたりして過しました。どんなにそがしい時でも、父は僕の休日には帰宅して相手をしてくれたんです。士官学校になつても一寸もちがいません。士官学校を出るとすぐ今度の事変に出征して、そうして戦傷を受けたわけですね」

そう話している中に、その方の顔は頬が震えて子供らしくなつて

行くじゃありませんか、私何だか一緒に泣き出したくなって行つたの……。

「自分の両腕を切ってしまう前に一度でいい、生れて初めて、そして最後にこの手で女の人の手にさわって見たい、そう思つたんです。手術後どう容態が変化するかわからないし、全快した所で血の通う感覚の有る手で、女の人の皮膚にふれて見る事は絶対に出来ないんです。母の手、妻の手、姉妹の手、一切の手をかねて、一度でいい、女の人の手にさわっておきたい。そして、それをしつくりと自分の身内に覚えこんでおきたい。そう思うんです。四つまで育ててくれた婆アやがあるの、手を引かれて歩いた事もあるんですが、それを覚えちや居ないし」

と切なそうな淋しそうな笑い方をして、

「随分妙なあさましい望みかも知れませんが、いよいよ両腕を切ると決つてからは、そればかり考えていました。看護婦さんが来てくれても、白衣の天使をつかまえて、下の物は取つて貰つても、手を握らせて下さいとは言えません。しよつちゆう考えていたものだから、ゆうべもツイ軍医殿に、冗談めかして言つてしまつたんですね」

昂ぶつたように起していた半身をぐったり横に戻すと、つぶやくように、

「でも、こんな話は、健全な人間には感じが伝わらないかも知れない」私、聞いている内に、その言葉の一ツ一ツが、いじらしく可愛くて哀れで胸が一ツぱいになつてしまったの。涙が自然にぼろぼろ頬を流れてるままで、わざと笑つたわ。

「そんな事お安い御用ですわ。そら、これがお母様の手」

と右手をさし出して、

「はい、此方がおくさまの手」

と左手を素早くさし出したんです。

「有りがとう」

と起き直ると、しっかりと両手に私の右左の手を握りました。顔は汗で光っているのに不思議に冷たい手だったわ。その大きい冷たい堅い手の中で私の小さい温かい手が見る見るとけてなくなっていくように思えたの。そして、しっかりと握りしめられている中に、それはそれは妙な気持がして来たわ。何て言ったらいいかしら、恥かしいような嬉しいようなまぶしいようなそれでいてしどいに目がくらんで行くような気がして来たんです。そして握られている手先からだんだんせき上って来て胸元で息がとまるような気がして、モウ自分の体を何処に立てておいたらいいのか、わからなくなっちゃったんです。

はっと自分に気がついてぱッと相手の手を振り切ったけれど、次の動作をどうしたらいいか、わからない。夢中になって室の外へ走り出してしまったんだわ。

#### 四

そう、そうね。それでアツサリ私はその方に惚れちゃったんだわね。翌日すぐ行きたかったんだけど、面会謝絶はわかっているでしょう。

電話で毎日容態を聞いたわ。そして経過良好と聞いて果物の籠を下げてお見舞いに出かけたわ。

そうしたら玄白先生が出て来て、御自分の室につれて行っていきなり、「何の為に来たのかネ」

って聞くんじゃありませんか。ぎっくりしたけれど、わざと笑顔になつて、

「何の為めだなんて。そりやお見舞いに上ツたんじゃありませんか」

すると先生は、急に私をいじらしそうな怒むあわれような目でじつと見下しながら、

「そう。先日からたびたびお見舞い有難う。併しだネ。もう見舞いは今日だけでやめて欲しいんだ。この間の事はアレだけで良いんだよ。一度でも亦君がああ男に顔を合せたりすると、どうもアレだけ以上に

延長する恐れがあるからナ。君は僕にたのまれて白衣の勇士の慰問をしてくれたんだ。それでうち切つてくれ給え。当局もね、慰問が個人の交際に変つて行くのをきらつてるんだ。色々と弊害もあつてね」

と淋しい少し冷たい笑いをつくつて、

「……殊に君のような若い綺麗過ぎる御婦人はだね。彼の少尉殿、すっかりたかぶつてしまつて、君の事を聞くから鎮静剤代りに君の二人の旦那の事を話しておいた」

そして、たしかに、とどめをさすように、

「あれは××將軍の独り息子さ。だから、あんな星の世界で育つたような男になつたんだネ」

私、その時位人間が憎いと思つた事は無かつたわ。出来たらとびかかつて相手の顔を十本の爪で肉も皮もムシリ取つてやりたかつた。先生はこう言つてるのね。お前は売物の女だ、一時或る男の何かの用をたした後は、その場かぎりですますものだ、後くされを作るな。お前に接近されると、相手の男が不幸になる。殊に相手は××將軍の独り息子だ。新聞に現代の乃木將軍なんてよくお写真も見つて知つてるだけに、先生の言葉のきびしさがよくわかるんです。つまり先生は私を慰問の何のと言つても、一ツの道具に使つたんだわね。無理におしつけられたお礼の物の多過ぎたのもそれだからだわね。

私口惜くやしさがこみ上げて来て一言も言えないで泣いてしまつたわ……。

ハンカチで顔を包んで泣き入っている私を、先生は、軍服の胸を正して、じつと見下していたわ。

散々泣いてしまつて、果物の籠に手をかけながら、

「じゃ、せめてこれだけでも上げて——」

と言つたら、

「そう。同じ病棟の者に皆にわけてやろう」ツて。

私、糸より肩が細まつたような心地で病院を出たんです。



その晩だったわ。姐さんも御存じね。あのかぶと町の人にいや応なしにつれ出されて、九州めぐりに出かけたでしょう。

一月ばかり東京を空けて帰って来たけれど、二度と病院をたずねる勇気は出なかったわ。でもその後の容態はと思うとツイ電話をかけてしまったの……。

そうしたら「目下経過はごく良好です」って。看護婦さんの声らしかったわ。

先生の言葉はよくのみこめてるんだけど、ほれちまったんですもの仕様がないわ。こうして着飾ってる帯留にだって指環にだって一ツ一ツ厭な記憶が、からみついてるんでしよう。私は色々深間ふかまになった男の人も何人だつて有るのに、まるで洗い落したように何の思い出も残ってやしないのよ。それが一度握られた手先に男の味がしびれこんで残ってるの。十本の指を残らず切りすてても、矢張り胸の中には、その感じがまざまざ出てきて体中の血が熱くわき出してくる、そんなだわ。

もう一度どうかしてあいたい、そればかり思ってたわ。それでも思い直し、思い直ししている中に夏になってね、土用の日盛りだったわ。頭痛がするから前髪はつかすいの間に薄荷水をつけていたの。その青いようなすつと冷えた匂いをかいでいる中にムラムラとして来て、プイと立って電話口に立ってしまったの。そうしたら、

「僕、××です。どなたでしょうか」

って御自分が出て来たじゃありませんか。

それは何だかとても若い声だったわ。七ツ八ツの子供のような涼しい声だったわ。なつかしいより何より、こんな若い声の持主に両腕が無いのだと思うと、私涙がとまらなくなってしまったの。

「私、〇〇先生と御一緒に御慰問に上りました者です。アノその後はいかがでいらっしやいますか——」

「ええ。有りがとう」

と、一寸言葉が切れて、

「この電話受話器を人にもって貰っているんです。でも、もう随分いいんです」

そして又、一寸間をおいて、

「あの時はどうも——」

そして電話がコウコウって鳴ってるの、何だかそれがあの方の息づかい見たいな気がするの。私受話器をしっかりと握りしめて、耳を澄ましていたけれど、コウコウって鳴るばかりだから、「じゃ、お大事に」と言うと、

「ええ、有りがとう」

って、それでガチャリと電話が切れてしまったわ。

あの方は私の所番地さえ聞いてくれなかった。そう思うと私は電話口に額ひたいをおしつけて声かぎりに泣いてしまったの……。

それから二日程して、先生から一枚葉書が来たわ。それにはペンでね、その後は無事にお過しの事と思う。昨日××の所へ電話が有った由。

××が僕に語っていた。あの女の人は好意らしい物を持っていてくれるらしい。この電話をキツカケに、たぐって行けば、或る程度の何物かに近づけるのじゃないかと思うと恐ろしくなった。こう言う事からどんな風にも自分の気持が募って行きそうで恐くてたまらなくなつたから、何も言わなかったと言って苦笑していた。ハッキリ言う。君はあの慰問の日だけあの男に必要なのだ。あの日以外には君はあの男に毒物にしかならない。どうぞ今後絶対に彼から消失してくれ給え。君にはただの遊びもあの男には破滅以上の悲劇をもたらすばかりだ。僕は二週間後再び大陸の第一線に勤務する事になるだろう。あの男も同じ頃病院を出て療養所に移るはずだ。これを読んでさぞ君は怒るだろうと思う。怒られるのを覚悟の上で書いた。では幸福に暮し給えよ。

私はこの葉書を細く細く裂いて畳の上に散らしながら、先生があ

方に言い聞かせている言葉を自分で自分に聞かせたわ。

「君そんな電話なんぞ気まぐれだよ。アア言う女は日に十度は、男に手を握らせているよ。あんな事にこだわっているものか」

そうして私は歯をくいしばって自分の手先を、あの日からそれだけではどんな男にもさわらせない手を、じつと見つめたの。そうしていると、どんな処女さんよりも白くて繊い軟い自分の手が、可哀そうで可哀そうで思わず顔におしあてて泣いちゃったわ。

## 五

それまで私、どうせこんな稼業しよばいなんだもの、神様や仏様の御気に召すものかと思つて不信心だつたけど、そうなるや矢張り目に見えない力におすがりするより他はないやねえ。日本橋のお吉不動様おきふどうさまにお百度ふんだわ。お吉さんは私等と同じ身の上でつらい目に遇いなすつたんでしよう。御利益が有るだろうと思つたの、どうぞモウ一度、一度だけでようござんす、その代り今日から息を引取るまで、他のお願いは致しませんからッて……。

ええ、不思議なものね。御利益が有つたわ。

あえたんですもの。そう道ばたの行きずりなの、横顔だけだつたけれど。小石川の植物園の門の前でよ。

昼下りだつたわ。私の乗つた自動車くるまが前の荷車の牛が動かなくなつていたので一寸とまったんだわ。窓ガラスに額をつけて外をのぞくとね。アノ門の鎖を一すじ渡した所にね、モウ一人の白衣のおつれと立っていないすつたの。

横向きだけど、ああして寝ていなすつた時よりもつとつとやつれて青い色なの。鼻ばかり、こう高くつてね、頬がそげてモミ上げの長いのが尚、衰えていなさるみたいで、随分悲しかった。紙まきをくわえていらつしやる所へ、おつれの兵隊さんがライターで火をつけて上げたんだけわ。一寸うなずいて受けなすつた高い鼻先へ、ぱつと薄赤く

火が映つたまで見たんだけれど、もう自動車くるまが動き出したじやありませんか。

何故彼時あのとき、私は車からとび下りて行かなかつたのでしょうか。誰が何と思つたつて、ならんで乗つてた男の嫉妬やまじらで、島田の鬚をねじきられたつてかまやしない。はだしでとび下りて武者振ついで、すがりついて、「あいたかつた。あいたかつた」つて泣けばよかつた。色気狂いつて砂利の上につきとばされたつてよかつた。私が問ぬけだつたの、たつた一ツ、たつた一度のメグリ合わせをにがしちやつたんですもの。私が、のろまだつたんです。仕様も無いわ。

それから二週間程立つたかしら。その頃何とか会社の重役だか社長だかが、しつこく仕方が無かつたの。酒ほてりのした重ツたい体を人の膝にのしかからせて、「おい、ナアどうだ」ナンテ言う鼻の頭の黒いブツブツを見ていると気が違ひそうなの。

大きな腕に腰をまきつけられながら、両手をしつかり組んで胸の下にかくして、「いや、いや。私の手にさわつちや、いや」ツて泣いたの。そんな奴に手を握られたら、残っているアノなつかしい恋しい手ざわりが、ぬけて行きそうに恐かつたの。

それもうるさいし、自分の気持も妙にこじれて物忘ればかりするでしょう。

「二三日遊んで来るわ」ツて、かぶと町のと出かけるふりで家をとび出しちやつたんだわ。そしてバスの中の広告で行先をきめて温泉宿に行つて二三日寝ころんでいたの。

その日は秋ももう終りなのに二百十日めいた降りだつたわ。さアッつとふつて来ると思う内に、ぱつと薄日がさして来たり、どんどん走っている真白い雲の間からクツキリ青空がのぞいたりしていたわ。

私は宿の二階で取ッ放しの床の上にアオムケに寝たまま、手すりに近い大きな百日紅の咲残りの紅い熱い花がぬれて重々しくゆれているのを眺めながら、それはそれは淋しい物悲しい心地になつていたの。

夕方になると風が出て来て、ガタガタ戸がゆれ出したけど矢張り電燈もつけずに寝ていたわ。

そしたら女中さんが夕刊を持ってきてくれて、

「まあ、たいそう、いんきでございますネ」

ってスイッチひねって行ったから、夕刊をボンヤリ膝の上にひろげて見ていると、レコードとソースの広告の間に小さく二寸程くぎって、

「四月×日第〇陸軍病院×号室にて握手せられたる婦人。至急牛込××病院受付まで御出を乞う」

それを見て十五分とたたない内私は薄暗い自動車の中で震えながら何度も何度もその文字を宙に浮べて見つめていたわ。そして窓ガラスに雨にぬれた街の灯が、うつって来るまで、ほとんど何も知らなかったわ。

## 六

あの方の逝ななんなすったのは、両腕の傷じやなかったんです。それは全快して義手をつける位になっていなすったのに、耳の傍そばの傷に何とか言う黴菌ばい菌がはいり直して、それが、いけなかったんですって……。

いよいよ自分でも覚悟なすったんだわね。後の事なんか色々仰有つてから、

「お父さん」

と改まって言い出しなすったんですって。

「僕は中山門ちゅうざんもんで死ななかつたのは間ぬけですね。後送の担架の上で舌でも噛かんで死んでおけばよかつた」

お父様の方は何と聞きなすったでしょうか。黙って、うなだれていらつしやつたそうよ。

「それで僕は非死ぬ前に、あいたい女の人があるんですが、ここへよんで戴けるでしょうか」

「そんな女があるのか」

他の場合とは違って、そのお声はそれはそれは優しかったそうです。「ええ。有るんです」

と、簡単に、あの時のことをお話しなすって、

「それツきり、会わないけれど、ズツとその女の事を考えて居たんです。一生に一度生れて初めて手を握った女の事がお母さんのように思われるし妻のようにも恋人のようにも姉さんのようにも思われるんです。中山門の下で二日三晩飲まず食わずで壕ぼりの石に獅噛しがみついて居る内に、すぐ目の先に小さい苔の花が土の割れ目から咲いているのを見つけた事があります。僕はその苔の小さい花位生れてから美しいと思つたものはありません。その女は丁度僕の生涯の中のその小さい花のように思われるんです。僕が生きた人間でなくなる前に、モウ一度その女に会って自分の記憶をたしかめて見たいのです。その花をつんでポケットの手帳の中にはさんだように、その女の顔を記憶の中にハッキリさせて土の下にもって行きたいと思ひます」

死んで行く二十五の若い我子の言葉を、お父様はどんな気持でお聞きなすつたでしょう。

「よろしい、今すぐよんで来てやる」

そう仰有つてすぐ八方に電話をかけたなり、問い合わせたりなすつたけれど、私の行方がわからなかつたので、とうとうアノ夕刊の広告になつたんですって……。

私が病院にかけこんで行つた時は、もう紫色の頬だつたわ。

「どうして、どうしてモツと早くよんで下さらなかつたの。おそいわよ。おそい、おそい、おそいじゃありませんか」

って、私、酸素吸入の道具をはねとばして、しがみついて泣き出したの。「おそいから、おたがいに、会えたんじゃありませんか」

と私の泣きだした意味がおわかんなすつたのね。

そう独り言のように仰有つてから、静かに話し始めたのだけれど、それはとても若い悲しい声なの。何だか随分遠い方から響いて来るよ

うな涼しい声だったわ。私、人間の男があんな悲しい遠い涼しい声で話すものだとは知らなかったわ。だから暫く何も忘れて仰向いて、うつりと聞いたの。

「今もね。君の事を、そう君の事ばかり考えていたのですよ。看護婦さんがカーネエシヨンの盛花もりばなをしてくれるのを見ながらね。淡紅色ピンクのカーネエシヨンは君の顔色見たいだと思っていた。だけど君は僕が考えていたよりずつとずつと綺麗ですね。君がこんなに美しいなんて僕は倅あわわせだ。本当にいい。それに君が、そんなに泣いてくれるなんて全く予想以外の幸福だ。僕は、君が僕の事を思い出しちゃ、滑稽こっけいな奴だと思つて笑っているだろうと思つていたんです」

私は齒を喰くい締めしめたけれどモウ駄目だと思つた。泣いたつて、さけんだつて走り廻つたつて、口や言葉じゃ、どうにもならない。間に合やしない、と思つたわ。

そう思うと、悲しいより口惜くやしいより、齒搔はがゆくて泣き笑ひしてしまつたの。それと一緒に玄白先生の葉書の全文が目の前にならんで見えて来たわ。

そう、私決心したわ。私は今自分の体と血で自分の誓紙を書いて見せなくちゃいけない。でなけりやモウこの人に私の想いを本当に知つて貰うことが出来ない。

「そうね、貴方の事を笑つてたか泣いてたか知らないけれど、とにかく私は貴方の為めなら何をしてもいいと思つていたわ。ほらこの通り十本の指を皆切つて上げてても惜しくはないと思つていたの。ほら、ごらんなさい。ほら」

と言うと、私は其処に在つた西洋花鋏ばさみをとり上げて、左の小指の根本をはさんで、うんと力を入れるとね、ぞつくりつて応えて、ぼとりと取れたわ。すぐまた、次の葉指をはさんで、

「そら、ごらんなさい。私今、この指十本共残らず貴下きげに上げるわ。それで私の氣持がわかるじやないの。それとも、わからなくて、どう」

て私、ひつひつて笑いながら、血の引く手を上げて見せたの。

そして又、はさみに力を入れようとすると、ドアの所から二三人が飛びこんで来て私をつかまえて、ひきずり出してしまったの。

気がつくと私は真白に手をまき立てられて、寝台の上に寝かされていたわ。看護婦さんが二人、白い姿で私のまわりに動いているだけで……。

あの方は大変御機嫌良く嬉しそうに、お亡くなんなすつたんですつて。「僕は幸福だ」ツて、くり返し仰有おっしゃつた後、正しく、

「天皇陛下とみばんざい」を、お唱となえしてね。

私の指は肌につけて、棺に納めて下すつたの……。

初七日の晩にね。お父様が、

「よく、拜まがんでやつて下さい」

と仰有るから、御親類の方がお帰りになつた後まで残つて、お仏壇の前に坐つていたの。引延しの写真の中の軍服姿のお顔は、若々しく丈夫そうで、笑つているのが、蠟燭ろうそくの光の中で、ゆらめいて物を言いそうで……。

ああ、こんな笑顔は私の目には知らない顔なんだと悲しくなつて見入つていたら、お父様が何時の間にか、そばへいらつしやつて、

「貴女の手を見せてごらん」

と仰有るから、両手をさし出すと、御自分の手のひらの上に大事な寶石か何ぞのように私の手を載せて、つくづく眺めていらつしやつてね、急に、ほろほると白い眉の下から涙を落して、

「可哀想な奴。いい奴だった。可愛い奴だった。本当にいい奴だった。貴女もそう思つて指を切つてくれたんだね。うんうん。そうか。有りがとう。有りがとう」

厳いめしいお頭つむぢがブルブル震えて私の膝の近くまで下つて来た時、私もありつたけの声を上げて泣いてしまったの。そうして同じ悲しさの

中で、私達二人は真の親娘おやのように手を取り合つて泣いていたんです。その後だったわ。小切手で、どっさりお金を下すつたから、お断りしようとするど、

「いや、取つておいて下さい。彼奴あいつがアンナに握つた貴女の手を、今後、酔ッ払いに握られたりせんようにナ。これで身をかためて、よい人妻になりなさい」

つて淋しそうにお笑いなすつたでしょう。ごもつともと思つて頂いたんです。だけどね……。

## 七

「だけどね——」

言いかけて思いせまったように、大きな涼しい眼の中に一ツばい涙をためていますから、

「だけど、どうしたのさ」

と、催促しますと、

「だけど、私今も口惜くやしくつて口惜しくつてたまらないの。どうしてもこの口惜しい気持は一生消えないでしょうよ。どうしても」

「何がそんなに口惜しいの。指を切つたことなの——」

と聞くと、

「ううん、そんな事。あの方と一緒に灰になつたんですもの惜しくな  
んぞ一寸も無いけれど、ただね、ただ——」

と両手でびつたりと顔を包むと、

「アンナ立派な方にめぐり合つていながら、ただ手を握られただけなんですもの。それッきりなのが、私口惜しくつて情なくつて、もつた  
いなくつて」

と言いながら畳たたみの上に泣きくずれてしまつたんですよ。

その白い細い首すじと波うっている華車まきしやな背中を眺めながら、私もね、女心と言うものが、しみじみ悲しくなつてきて、いつか声を合せ

て泣いていましたっけ……。